

# はるか

ゆたかな暮らしの  
情報紙

令和7年 春号

「ありがとう」を花せるお葬式  
東京 千葉 埼玉 神奈川



株式会社 孝行舎

—お見積り無料 ご相談随時受付—

本社(こうこう庵併設)：東京都足立区中央本町 4-17-2  
葬儀サロン：東京都足立区中央本町 1-19-2  
赤坂営業所：東京都港区赤坂2-14-5 Daiwa赤坂ビル7階



0120-81-5548

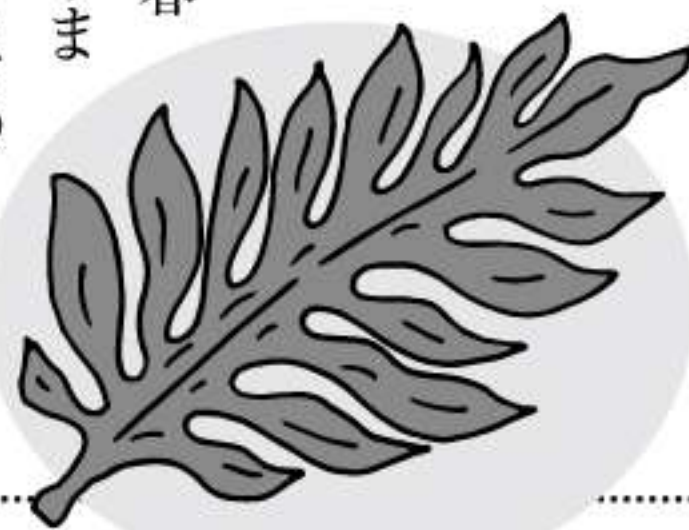
孝行舎 検索

深夜・早朝でもご遠慮なくお電話下さい  
24時間・365日寝台車がお迎えにまいります

- すこやか「食」の旅——ワカメ
- ご存じですか?——「ピカソ」
- 伝統のモノ——扇
- 花ものがたり——キンセンカ
- 生活の中の仏教語——隠密
- 仏事と葬儀の知識——出棺

すこやか  
「食」の旅

## ワカメ



日本には、うぐいすや桜など、春を告げる動植物はいろいろありますが、海からの贈り物「ワカメ」もその一つです。現在市販されているほとんどが養殖ものとはいえ、日本全国どここの沿岸でも採れる「ワカメ」は、古代の人びとにとっても身近な食材だったようです。

### ◆『万葉集』にみるワカメ

『万葉集』には一般庶民の暮らしがうかがえる歌も多く、海の幸や山の幸を詠んだ歌からは、古代の食文化を垣間見ることが出来ます。今回ご紹介する「ワカメ」は、当時の人びとに最も好まれた海藻だといわれ、この「ワカメ」を題材にした、詠み人知らずの次のような歌も収録されています。

——角島の 迫門の 稚海藻は人の 共荒かりしかど  
吾とは和海藻(注：和歌の詠み下し文における漢字や仮名の表記については、ほかにも異なるものがあります)——この歌は、ワカメを海の乙女にたとえて詠んだものといわれ「角島(現在の山口県にある島)の瀬戸(狭い海峡)のワカメは荒々しくて人には靡かないけれど、私には和やかに靡いてくれる」というのです。

因みに、徳島の鳴門同様、潮の流れの速い角

島の瀬戸で採れる「ワカメ」は良質だそうです。

### ◆抜群の栄養バランス

「ワカメ」は、各栄養素がバランスよく含まれる優良食材で、その含有量は、食品成分表の多くの項目で海藻中トップを占め、また牛乳と比べても、カルシウムは同量、カリウムやビタミンAは5倍も含まれているといえます。

### ■貢納された「ワカメ」

「ワカメ」が健康に良い食べ物であることを、古代の人びとが承知していたかどうかは別として、飛鳥や平城京の時代、前出の山口をはじめ現在の千葉、新潟、福井、三重、島根などに位置するほとんどの臨海諸国から、都への貢ぎ物として「ワカメ」が納められていたことが、出土した木簡(古代、文字を書き記すために用いた木の札)からも確認できるそうです。

では、その「ワカメ」はどのようにして食べられていたのでしょうか。貢納された「ワカメ」は生ワカメだけではなく、乾燥させて粉にした、粉ワカメもあり、これは豆などの煮物に加えたり、また、ふりかけのように飯にかけてたりして食べていたと思われます。

### ▶現代の簡単ワカメ料理◀

※どちらも短時間で作るのがコツです。

・しゃぶしゃぶ……茶色の生ワカメを沸騰させたお湯にさっと湯通しし、お好みでポン酢やマヨネーズ、ドレッシングをつけて食べる。

・てんぷら……水でもどした乾燥ワカメ(カットワカメ)の水を切り、小麦粉をまぶして高温の油でパリッと揚げる(\*ワカメ嫌いのお子様にもおすすめです)。



ご存じですか?

ピカソ

私たちは、歴史上の人物など一般によく知られている人について「きつとこういう人だったのだ」などと、思い込んでしまっている場合があります。しかし、ときには「こんな意外な面もあったのか」と驚いたり、「私たちとあまり変わらないじゃないか」と、その暮らしぶりに親しみを覚えたりすることもあります。

\* \*

今回は、世界中で知らない人はおそらくいないと思われる、ピカソについてご紹介しましょう。



ピカソといえば「天才画家」という言葉が無意識に浮かび、絵にはまったく関心がないという人も、ピカソの作品は「認識可能」なのではないでしょうか。では、ピカソはどのような人物にして二十世紀を代表する芸術家「ピカソ」になったのか、その生い立ちから簡単にご紹介しましょう。

### ■「家族の宝」だったピカソ

パブロ・ピカソは、1881年10月25日、スペイン南部アンダルシア地方の港町マラガに生まれます。

父親が41歳のときに第一子として誕生したピカソは、26歳だった母親、祖母、叔母を含む家族全員にとって「宝」であり、皆を夢中にさせる存在だったといえます。

ことに母親の溺愛ぶりについては後年ピカソ本人も述べているように、たとえば「兵士になれば、お前は将軍になるだろう。修道士になれば、いずれローマ法王になるだろう」と、幼いピカソを称賛したそうです。

画家の道を選んだピカソは、将軍にも、ローマ法王にもなりませんでしたが、母の「予言」通り、その道で特段に秀でた唯一無二の芸術家として、全世

界の人びとに知られるようになるのです。

### ■13歳で父を超えたピカソ

では、ピカソの画家への歩みはどのようなものでしょうか。

デッサンの教師で地元美術館の学芸員でもあったという父ホセは、もともとは画家志望でした。その父の血筋もあるのか、母マリアによれば、ピカソは「言葉を覚えるより先に絵を描いていた」といいます。ホセはそんな息子の才能をいち早く見抜き、デッサンの基礎的技法などの英才教育を授けたと伝えられます。

後にピカソ自身が語ったところによると「12歳の頃には、デッサンならラファエロ（イタリアのルネッサンス期を代表する画家）並みに描けた」といいます。

そして、ピカソ13歳の折、息子の絵の才能にはとても敵わないと感服したホセは、自分の絵の道具一式をピカソに与え、その日以降、二度と絵筆を持つことはなかったといわれます。

### ■他を圧する集中力

ピカソは学業に関しては不得意で、特に算数は大の苦手。追試を受けても合格点を取れず、先生にこっそり答

えを教えるもらって何とか進級ができたほどでした。しかし、画業に関しては、その集中力は他を圧していたといえます。

1897年、16歳のピカソはスペインで最高峰の美術アカデミーに群を抜く成績で合格します。1カ月の制作期間を与えられた入試の課題を、ピカソはたった1日で仕上げ提出したのです。しかしながら、アカデミーでの授業は物足りない限りで、自分にとって学ぶべきものがないと考えたピカソは美術館に通いつめ、巨匠たちの絵からインスピレーションを得て、自分の作品に投影したといわれます。

### ■衰えなかった制作意欲

1973年4月8日、ピカソは南フランスで91歳の生涯を終えますが、最晩年まで精力的に制作を続け、美術史上最も多作（絵とデッサン／1万3千余点、その他の版画や彫刻、陶器／約13万点）の画家として、ギネスにも認定されているほどです。

ピカソはこんな言葉も残しています。——子どもはだれでも芸術家だ。問題は、大人になっても芸術家でいられるかどうかだ——



# 伝統のモノ

## 扇

# 折りたたみ文化の傑作



日本には昔から、さまざまなものを折りたたむ文化がありました。着物も蒲団も卓袱台も、使わないものは折りたたんで仕舞っておく——それは、狭い空間で暮らす日本人ならではの知恵が生んだ文化なのかもしれません。

今回ご紹介する「扇」は、そんな折りたたみ文化の傑作の一つといえそうです。

### 「扇」の定番

「扇」は「扇子」ともいいます。現在のこの「扇」は、私たちの暮らしのどんな場面で使われているのでしょうか。酷暑の夏の外出時、バッグに携帯することもありますし、結婚式など儀礼の場に和装で列席する場合には、袴や帯に差し忍ばせます。また、神事や能などの古典芸能、落語でも「扇」は欠かせないものです。

### 「扇」のルーツ

では、この「扇」はどのようなようにして誕生したのでしょうか。一説に「扇」は、平安時代以前に大陸から伝わった団扇を工夫改良したのが始まりだともいわれます。その当時

の団扇は木製で重かったことから、楡を薄くスライスした板を扇形に綴り合わせ、開閉自在の折りたたみ可能な「楡扇」が作られるようになり、これが日本で発明された最初の「扇」だといわれています。

たとえば、厳島神社（広島）の宝物館に収蔵されている平安時代の「彩絵楡扇」（国宝）は、平家奉納と伝えられ、そこには男女の童子や老松が美しい彩色で描かれています。このような楡扇は、主に宮中での儀式で正装する際に用いられたものだといえます。

### もう1つの扇

やがて、和紙作りが広く普及するようになると、楡扇とは別に、竹の骨に紙（あるいは絹）を張った、より軽い扇が出現します。平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて現れた紙扇がそれで、「蝙蝠（かわほり）」と呼ばれ、いまも扇／扇子を意味する言葉として用いられています。

この意外な呼称の由来は、紙を張った扇、つまり「かみほり」が「かわほり」となり、それに蝙蝠（こうもり）の漢字を当てたのは、扇を開いた形が、蝙蝠の翼をバタバタさせるのを想わせるからだといわれています。しかし、これには異論もあるようです。

### 西洋にみる扇

折りたたみのできる日本の「扇」は、中国を経て16世紀頃にヨーロッパに伝えられます。やがて「扇」は王侯貴族の女性たちの必需品となり、日本とは異なる発展を遂げるようになります。

ロココ文化と共に華やかなサロン文化が花開いた18世紀になると、豪華な装身具をまとった女性たちがサロンの雰囲気演出し、その装いの仕上げに「扇」を手にするのが、上流婦人のたしなみとなっていきます。

当時、ヨーロッパで作られていた扇の素材は、象牙やべっ甲、金属などに紙や羽根、レース、サテンなどの布を組み込んだものが多く、扇の平面には花や鳥、神話や聖書の物語などが描かれ、日本の「扇」のイメージとはかけ離れたものであったようです。

また、この「扇」がことばを交わす代わりに使われたこともあります。

【扇ことば】スペイン語で初の手引書が出版されたという「扇ことば」には、50通りもの扇の使い方が載せられていました。例えば「左手で顔の前に扇を持つ」と「お近づきになりたい」、「扇の先端を右頬に当てる」と「はい」で「左頬に当てる」と「いいえ」を意味するといった具合でした。

## 「キンセンカ」

持ちがいいことから日本では仏花として用いられることの多い「キンセンカ」は、漢字では「金盞花」と書きます。これは「キンセンカ」の花が、金色の盞(さかずき)のような形をしているからだとはいわれます。別称や方言としては、いずれも花期が長いことに由来して「チョウシュンカ(長春花)」や「トキシラズ」などと呼ばれています。



また、中世ヨーロッパでは、虫刺されやケガ、胃腸病などの民間薬としても用いられ、そのほかに、高価なサフランの代用品として料理の色付けに使うために、樽詰めにした花びらが売られていたそうです。

ギリシャ神話には「キンセンカ」にまつわる次のようなお話があります。ある少年が太陽神アポロンに恋焦がれることを妬んだ雲の神が、太陽を8日間も隠してしまい、少年はその悲しみから自ら命を絶ってしまいます。そんな少年を哀れんだアポロンは、まるで太陽が輝いているかのようなキンセンカの花に、少年を生まれ変わらせたというのです。

\*花言葉……「悲しみ」「失望」「嫉妬」など。

## 隠密

「この件はどうか隠密に願います」と言えば、表立つことのないように内々にしてくださいという意で、仕事の交渉の場などで使われる言い回しです。また、時代劇などに登場する「(公儀)隠密」は、幕府の命を受けて密偵として陰で働く忍びの者のことです。

この「隠密」はもともと仏教語で、仏さまが説く本意は、経典に明瞭に顕れているものと、その教説の奥に隠されて説かれている教えがあり、前者を「顕彰」、そして後者を「隠密」といいます。

たとえば、浄土真宗の教義を記した『教行信証』には、浄土三部経の一つ『感無量寿経』の表の文面では「自力念仏」(自ら念仏を唱え、その功德により極楽浄土に往生しようとする)を説き、その奥の部分では「他力念仏」(すべて阿弥陀仏の本願の力による)と信じて念仏を唱えることで浄土に往生できるといふことが説かれています。

日常においても、表に顕れていることのみを理解するのではなく、その背後にある真意を読み取るようにすることが大切です。



## 出棺

「出棺」は、まさに故人とのお別れ。遺族にとってはもともと辛いときともいえます。

まず、棺を霊柩車に納めた後、火葬場へ向かう前に喪主または親族代表が出棺のあいさつをします。あいさつは、故人と自分との関係述べた上、会葬者へのお礼、生前に故人がお世話になったことへの感謝、さらには遺族への今後の支援をお願いするといった内容が一般的です。しかし、希望によっては、喪主ではない配偶者や遺族がひと言お礼を述べたり、短く思い出を語ったりしてもよいでしょう。

一般会葬者は、告別式で焼香を終えた後はすぐに帰らず、できるだけ留まって出棺まで見送るようにしたいものです。その際、棺が霊柩車に納められるときや霊柩車が発するときは、故人の冥福を祈って黙とうや合掌をし、車が見えなくなつてから静かに場を離れるようにしましょう。

(※「出棺」につきましては、地域あるいは葬儀社などによって、その作法が異なる場合があります)

